

モデル事業名	富士見の地域資源を生かしたビジネス・まちづくり活動の発展を通じた コミュニティ創生・地域間交流促進事業
活動団体名	ルバーブ生産組合
ホームページ	http:// (活動団体のHPのアドレス)
所属/ 担当者名	ルバーブ生産組合 会長 エンジェル 千代子
連絡先	携帯番号：090-5553-2376、Eメールアドレス： chiyokoa@po19.lcv.ne.jp
活動地域	長野県諏訪郡富士見町

● 活動地域の概要

富士見町の状況 / 人口の現状や推移：平成1年 14,999、平成20年 15,417 / 世帯数の現状や推移：平成1年 4,383、平成20年 5,613 / 高齢化率：平成1年 19.19%、平成20年 31.88% / :平成20年における農用地面積：1,341ha、耕作放棄地：田んぼ 33.6ha、畑 27.6ha、(合計 61.2ha) / 鳥獣被害額：平成10年 2,388千円、平成15年 11,264千円、平成20年 6,488千円。/平成20年度に町で行った営農に関するアンケートによると、担い手の54%が65歳以上であり、農業経営を5年後に縮小・中止したいひとが約5割を占め、後継者が農業をやる可能性は極めて低いと、まとめられている。



年々増える耕作放棄地



富士見町の位置

● 活動地域の課題

富士見町では、若者の都市部への流出、少子高齢化の進展により、農地の耕作放棄地が増大傾向にある。また後継者のいない農家が大半であり、将来的に一層多くの農林地が荒廃していくとともに町の産業が衰退していくことが予想されている。これに伴い、農地に対する野生鳥獣被害が深刻化している状況にある。他地域からの人口流入も進んでいるが、多くは退職後の高齢者であり、町の福祉関係の財政を逼迫することも懸念されている。

一方、富士見町では、町の地域活性化を図るために、特産品作りや環境活動、地域間交流等を行う様々な団体が存在している。しかし、それぞれの活動は単独で行われており、活動間の連携は薄く、それぞれを地域の宝として結びつけ、情報を集約し、富士見町の魅力として発信する媒体も存在しない。行政が作るHPのように公共性・公平性などの枠に縛られない、富士見町の情報を総合的に発信できる民間主体のポータルサイト作りが求められている。また、そのような媒体を通じて、富士見内及び他地域の若者に富士見の宝、魅力を集約して発信することにより、他地域との地域間交流を促すこと、あるいは新規就農希望者等への情報提供も可能となる。

富士見町では特産品開発推進交付金事業を行い現在も特産品開発・販売には力を入れている。しかし、交付金対象とされたものが具体的な製品化へ結びついているものが少なく、その中には加工施設があれば、販売ルートに乗せる可能性があるものが多い。ルバーブ生産組合・食用ほうずき生産者では、農業収穫体&製品作り(ジャムやケーキなど)、消費者と生産者を直接結びつける販売ルートの確立など、新たな取り組みも始まっている。農業体験・加工・販売・レストランなど、総合的に富士見町の魅力を集約できる拠点の検討は急務である。そのためには、点在する宝を結びつけ、拠点作りのための住民の同意形成がまずは必要である。

● 活動の内容

・平成21年度

活動1：富士見町の地域資源を活かした持続可能なビジネス・まちづくり活動の掘り起こし・ネットワーク化

①富士見の気候風土や地域特性を生かした富士見の農林業を活性化させる新しい特産品づくり(ルバーブ、ほおずき、ブルーベリー、干し柿づくり、黒米、黒米を活用した加工品等)に取り組む関係者、団体、グループ等を掘り起こし、交流を進め、ネットワークを構築する(「知ってもらさあ おらほーのまち会」の立ち上げ)。各団体に呼びかけ、地域づくり、外部有識者を招いた勉強会、交流会の開催等を通じて実施。その際に、これらの団体が抱える課題を共有、整理するとともに、団体間の連携方策や都市域との地域間交流による活動の発展可能性等について検討を行う。

また、富士見で活動する団体の取り組みやルバーブ等の特産物等についてわかりやすく紹介するパンフレットを作成する。パンフレット等においては都市域の関係者に富士見の魅力を伝えるため、特産物については、その出で立ち、生産現場の様子、特産物を使った新しいレシピなどの紹介も含める。

活動2：「知ってもらさあ。おらほーのまち会」のネットワークの団体と都市域をつなげるポータルサイトの立ち上げ

富士見町の地域資源を生かした持続可能なビジネス・まちづくり活動等現在地域に点在する点(各活動)の情報を集約してわかりやすく紹介するポータルサイト(HP)を立ち上げる。また、使う側にとって利用しやすいポータルサイトにするために、富士見の住民や都市域の住民からの意見も聞きながら(活動3の交流事業実施時にヒアリングを行う)、開発を行う。

活動3：富士見と都市域との地域間交流、2地域居住推進のための交流事業の試行等

富士見町と都市域との地域間交流、2地域居住を進めるため、まずは、諏訪地域の観光協会や地域企業、地域づくり団体が共同して昨年10月中旬から11月中旬にかけて開催した「づーら」のイベントや川越市砂新田婦人会との体験交流、パノラマリゾートと協働による川崎市の小学生の体験交流事業によって得られる成果、課題を整理する。

また、都市域の住民が数箇所の富士見の持続可能なビジネス・まちづくりの体験を促し、若者、子供たちに対する環境教育の場を提供するとともに、リピーター型の地域間交流や2地域居住推進の仕組みづくりを目指して、都市域での当該交流事業を担う団体と「知ってもらざあ。おらほ一のまち会」のネットワークの団体との交流事業を試行するとともに、継続的な仕組みづくりのための意見交換を行う。

交流の試行及び意見交換にあたっては、単なる個人の体験にとどまらず、地域づくりを行う団体間の交流を促し、都市域のまちづくりのあり方、富士見の地域活動の状況等を学びあうことを通じて、お互いの団体の活動の発展に寄与させることを目指す。そして、富士見と都市域との継続的な関係構築、ネットワーク形成に資するよう、両地域の活動団体のリーダー同士の関係構築に重点を置いて行う。

活動4：富士見内及び富士見と都市間をつなげる新しい“ものづくりと出会いの拠点”づくり

富士見の地域資源を生かした持続可能なビジネス・まちづくり活動を継続的・発展的なものとし、相乗効果の高い形でのネットワーク活動を展開していく。そして、リピーター型の都市域との地域間交流、2地域居住を促していくことにより、“新しい公”を担う組織を継続的、自立的なものとして発展させていくため、富士見内及び富士見と都市間をつなげる新しい“ものづくりと出会いの拠点”づくりに向けた検討を行う。本年度は、このような拠点のあり方について、地域の関係者や都市住民のニーズ等を把握するためのアンケート、ヒアリング調査やワークショップ等を開催する。

● 活動の成果

・平成21年度

富士見において活動を行う各団体との連携、協働関係を構築するために「知ってもらざあ おらほ一の町」会を設立した。「ルバーブ生産組合」、食用ほうずきの特産品化を目指す「パディアス農園」、ひまわり油を製品化している「立沢ひまわりの会」、黒米の生産および黒米ビール等の新しい黒米の加工品づくりを行っている「元気を出さず葛木宿の会」等の団体のデータ収集・聞き取り調査を行い、ポータルサイト・富士見町共通の特産品パンフレット作りのための準備をおこなっている。富士見のまちづくりを行う団体、人等のネットワーク化を図り、今後のものづくり、地域づくりの拠点に關した話し合いを行うため、外部から講師を招き、「こだわりの食・ものづくりによるまちづくり」や「特産品の流通・都市への発信を通じたまちづくり」の講演会・及びワークショップ・アンケートを行い、住民の関心を高めるとともに、意識調査などを行っている。



● 今後の課題及び展望

・課題

各団体の取材を重ねていると、後継者不足などの問題は想像以上に深刻で、各活動をどのように存続させていくかは想像以上に大きな問題。加えて、他地域との交流等を長く続ける活動にするためには、受けて側の農家たちに負荷をかけず、どんな方法があるのか研究する必要がある。また、富士見町の現状では、特産品を食べさせる場所がなく、この解決は急務であるとの意見が多く寄せられている。

・展望

3月に立ち上げ予定のポータルサイトの継続。当初3年計画での充実を検討していたため、資金のない中でどのように運営をしていくのが課題。特産品づくりに取り組む活動だけではなく、その輪を事業者に広げる必要があり、来年度からは、生かされていないアイデアを販路に結びつくまでの仕組み、ネットワーク作りに力を入れる必要がある。また、今年度は「食」をテーマに活動に焦点を当てて活動をしてきたが、今後はその他の町づくり活動に取り組む団体・個人との交流も進めていく。

都市部との交流については、ストーリー性を重視した、魅力ある体験型・参加型の農業体験プログラム作りを広げていく。コミュニティ創生の実効性については、提案する活動によって、まちづくり、地域づくり活動を担う関係者が一同に会する研究会を立ち上げ、住民等に対する地域ニーズのアンケート調査等を行い、地域住民の合意形成ながら活動を展開する。また都市域と当該協議会との地域間交流を進めることにより外部の人材もまきこんだ地域の人的ネットワークの維持・発展させていく。